

# 古典教育の價值と方法

石 山 脩 平

## 序 論

こゝに古典教育とは、古典を教材とする教育を意味するのであるが、實はその中に古典の陶冶價値を特に重視する氣分をすら含んでゐる。漢文古典に關する特別の理解を缺いてゐる私としては、廣く東西の古典一般を問題とする外はないけれども、この小篇が漢文學會に於て發表せられるといふ事情は、自然私の關心を漢文古典に惹付ける傾向があるので、古典教育一般の考察から延いて漢文古典教育に對する私見を導き出したいと思ふ。固より門外漢が遠く横合から投げつける一石である。的を外れても恥は少い。

擬て問題の要點は、古典教育が果して強調せられる價値を有するか否か——強調どころか一體古典教育は現在及び將來に於て果して存在の理由を有するか否か——といふ點に存する。私はこれを検討するために先づ西洋及び日本の教育史上に於ける古典教育の足跡を概観して、それが凡そ如何なる運命を有するかの暗示を得たいと思ふ。次に教育學に於ける教育段階論を基礎として古典教育の固有の地盤を追求し、その地盤に於ける古典教育の價値をば總論的に斷定するであらう。第三にこの價値を各種の相に於て展開せしめ、そこに本篇の主たる論旨を提示する積りである。そして最後にこの論旨を漢文古典に就て具體化し、特に日本に於ける漢文古典教育の價値を列舉して、その價値に適應せる教育方法上の大綱を附説したいと思ふ。

### 一、古典教育の史的概観

古典教育が意識的に強調せられたのは、恐らく近世教育史の劈頭に於てであらう。而も近世教育史は古典の復興を以て出發しながら、大體に於て古典教育の衰頹過程を辿つて來たと私は思ふ。先づ西洋教育史は十四世紀頃伊太利より勃發した文藝復興運動を以て近世期の發端とするのであるが、それは明かに羅馬古典——遡つては希臘古典の復興であつた。そこでは、希臘、羅馬の古典が人間性 (Humanitas) をよりよく發揮してゐるといふ意味から、これをより「人間的なる文學」(Literae humaniores) と呼び、中世期を支配して來た「より神的なる文學」(Literae divinae) としての神學に對立させて讚美し強調した。これが即ち近世教育史の發端をなせる人文主義 (Humanism) である。然しながらこの人文主義は本來「神的、宗教的なるもの」に對立する「人間的現世的なるもの」を標榜して居りながら、事實は宗教教育と對立しないで却てそれと結合して發展した。即ち北歐の宗教改革運動はその根本精神が自我の自覺、自由主義の擡頭に根ざす點に於て、南歐の文藝復興運動の發展と見られるだけでなく、事實上宗教改革の指導者たるルーテルやメラントンは、人文的教科による民衆の啓蒙が宗教教育の先決要件であることを洞察して、大いに希臘羅馬の古語古典を奨励したのである。

古典を教材とする人文主義教育はその本來の意義に於ては、人間性の多方面の教養を目ざし、その手段方法として希臘羅馬の古典を尊重したのであるが、十六世紀頃に及んではこの方法としての古典學習そのものが目的となり、而も單にその形式的方面の修得に因はれて、内容の玩味活用を忘れ、人文主義とは單に古語の修得に不當の勞力を空費する所の忌むべき「言語主義」(Verbalism) と考へられるに至つた。而もこの傾向は更に進んで、古典作品中キケロのみを偏重し、その文を暗誦し、その語句を用ひて思想を表現することに専心没頭する所の「キケロ主義」(Ciceronianism) にまで墮落するに至つたのである。

人文主義、古典主義が斯かる墮落の途を辿りつゝある間に、一方では反人文主義、反古典主義の教育が次第に勃興して來た。それは即ち實學主義 (Realism) の教育とそれに伴へる母國語運動とである。實學主義は事物 (Res) に即する教育であつて、單なる言葉 (Verbum) に因はれたる言語主義と對立する。古典教育即ち人文主義教育は言葉による教育であり

書籍による教育であるが、實學主義は事物に直接し實生活に即して教育することを本領とする。併し實學主義と雖も全く言語なしには教育を行ひ得ない。故にそれは言語一般を排斥するのではなくて古典語を排斥するのである。或は少くとも古典語に先立つて母國語を教へることを力説するのである。斯くして實學主義は母國語運動と結合して發展した。ラトケ・コメニウス・ロック等の實學主義者は何れも外國語の前に母國語を、古典語の前に近代語を教育の主要内容とすべきことを説いた。コメニウスの考へた教育制度に於ても一歳より六歳までの幼児を教育する「母親學校」(Schola materna, die Mutterschule)即ち家庭教育は文字通り母が「母の言葉」(Muttersprache)を以て庶物の知識を授け、道德的宗教的陶冶を行ふものであり、七歳より十二歳までの少年を教育する「母國語學校」(Schola vernacula, die Schule der Muttersprache)は獨逸語を以て讀書算數其他の基礎的陶冶を行ふ。十三歳より十八歳迄の青年を收容する「羅甸語學校」(Schola latina, die Lateinische Schule)に於て初めて羅甸語を主として希臘語及びヘブライ語を教へ、最後に十九歳より二十四歳までの初期壯年期に該當する「大學」(Academia, die Akademie)に於て古典の一層深い教養を與へるのである。右の提案はそのまゝ實施せられたのではないが、併し近世歐洲諸國の教育制度の基本形態を提供した。即ち家庭教育及び初等教育は母國語を中心とし、中等教育及び高等教育が古典語を中心とすることが、一般の原則となつたのである。

實學主義は斯くの如く母國語運動と結合することによつて古典主義との對立を益々明かにして來たのであるが、この意味の實學主義の背後にある時代精神として私は二つの基本動向を數へることが出来る。第一は近世文化の基調をなせる物質文明への要求——その指導力たる科學的運動であり、第二は等しく近世史の基本をなせる國民的自覺であり、國家主義運動である。第一に科學的精神を以て自然界を認識し、認識を利用して自然界を支配し、自然を人間に奉仕せしめんとする近代人的要求——ペーコンの所謂「知識は力なり」(Scientia est potentia)との標語——は直接に「事物」そのものに人間の關心を惹いて「實學主義」を起し、その場合に必要な言語は母國語を以て事足るものとして「母國語運動」に結合した。第二に十六、十七世紀頃は歐洲各國がその宗教的、政治的紛争を通じて漸く國民的自覺を促され、宗教も政治も一般

文化も各國獨自の性情に基づいて個性化せられて行つた。斯くして聖書の母國語譯、國教の制定等と相關聯して母國語教育運動が各國に勃興したのである。

物質文明と國家主義といふ近世史の基本動向に支へられた實學主義、母國語運動は、精神的にして超國家的なる古典教育を次第に壓迫し排撃して來た。古典教育は初めは中等學校以上の教育の中心的地位を占めてゐたのであるが、それも次第に排斥せられて、大部分の中等學校は所謂「實科中等學校」(Realgymnasium)として古典よりも實學即ち自然科學や實業的教科を主とするものとなり、僅少の所謂「文科中等學校」(Humanistisches Gymnasium)が少數の上流子弟を對象として古典教育の殘蘄を守るといふ現狀である。高等教育即ち大學に於ても、文科中等學校から學生を受取る哲學科や神學科や法學科のみが古典教育を尊重し、實科中等學校の系統を引く所の醫科や理科や農科や工科等は次第に古典教育を棄てつゝあるのである、斯くして要するに現在に於ては古典教育は中等教育の一部及び高等教育の一部に殘存するのみであつて、初等教育の全部及び中等高等教育の大部分は、反古典主義の指導精神に支配せられてゐると言ひ得るのである。(以上は主として獨逸に就て述べたのであるが、英米佛等に於ても事態は略同様である)

以上の史的概観によつて、吾々は西洋の古典教育が次第に高等教育の領域に追ひ詰められて來たことを論結し得るであらう。併しこれは一層精確に言ふならば、教育が普及して國民大衆が教育の對象となり、その國民大衆は生活の直接の必要から教育理想や教育内容を要求するが故に、古典主義の代りに實學主義や母國語を採用したのである。故に古典教育は初め國民大衆の間に行はれて後にそれが少數上流の人士の間に追ひ詰められたのではなく、最初から上流少數の人士のための教養であり、そして教育は初め上流少數の人士にのみ行はれ、下層大衆は教育の機會に與からなかつたのであつて、彼等が教育を與へられる様になるに及んで、それは彼等の生活の必要を直接に充たすものでなければならなかつたのである。故に古典教育が下層から上流に追ひ詰められたといふよりも、教育の領域が上流から下層に擴大せられ、而も古典教育は上流の間に留まつたと解すべきである。

日本の近世教育史も亦古典教育の地位に關する限りは略々西洋のそれと軌を一にしてゐると私は思ふ。徳川幕府の文教奨励によつて日本は文藝復興期を迎へたのであるが、そこに先づ復興したのは漢文古典であり、就中儒學であつた。朱子學派、陽明學派、古學派、折衷學派、士道派等は何れも儒學を中心とする古典教育の分派と見ることが出来る。教育制度から言つても、幕府直轄の昌平坂學問所の朱子學を始めとして、藩學、郷學の如き公立教育機關は漢學を中心教科とし、その對象（生徒）としては主として士族子弟を收容したのである。

之に反して寺子屋は庶民教育機關として發達し、町人百姓の子弟に對し生活に直接必須なる讀書算數を教へた。勿論そこに（四書の如き）漢學も行はれたけれども、それは他の教科内容に比しては微々たるものであつた。要するに寺子屋は平民教育、被支配階級の教育を司り、藩學、郷學等は士族教育、支配階級の教育を司つたと見ることが出来る。

然しながら國家主義に對する古典主義の地位に關しては西洋と日本とは明かに趣を異にしてゐる。西洋の國家主義は母國語運動を起して超國家的なる古典教育と對立したけれども、日本に於ては漢學こそは治國經世濟民の動機を以て學ばれたのである。尤もやがて國學が勃興するに及び、國學者は自己の立場を有利に展開するために漢學を日本國家主義の敵であるかの如くに排撃し、こゝに漢學古典教育は國家主義教育と對立させられた。但し國學運動それ自身が日本古典教育であることを思へば、こゝでは古典教育一般が國家主義と對立したのではないこと、なる。而も日本の漢學は、國學者の排斥にも拘らず事實上は國學にも劣らざる程度の國家的關心に支へられ、殊に幕末から明治にかけて日本國家の發展に貢獻した人士は却て漢學の素養の上に立つた人々の中に多かつたのである。それ故に日本に於ては國學も漢學も共に古典教育の内容であつて、それは國家主義と對立するものでなく、唯庶民大衆の生活に直接必要なる教育を尊重する實學主義と對立するのみである。

明治以後の日本教育は西洋教育を多分に採入れて來たが故に今日の日本教育に於ける古典主義は國文古典と漢文古典と西洋古典との三種を含んでゐる。そしてそれ等が何れも上級の學校に於て事實上支配的勢力を占めてゐる。昔は士族、支

配階級の教養であつた古典が今日に於ては高等教育を受ける者の教養を特色づけて居り、そして高等教育を受けた者が事實上社會の各方面に於て指導的地位を占めることを想へば、やはり古典教育は支配階級の教育であると言ふことが出来る。唯今日に於ては支配階級と言ふよりも指導階級と言ふ方が適切であり、而もその場合の階級とは身分や財産上の階級ではなくて、主として精神上的の優劣から来る階級である。故に古典教育は精神的貴族主義 (Geistesaristokratie) を代表する。精神的優越者が民衆の指導階級となること、而もその指導階級は古典的教養を以て特色とすること——この意味の精神的貴族主義こそ古典教育の價値を決定する根本前提である。

## 二、教育の段階に於ける古典教育の地位

上述の史的概観が論結する所によれば、古典教育は高等教育に於てその固有の地盤を興へられ、指導階級の教養を特色づけるものである。この事は如何なる根據に基づくか。人は最高の教育段階に於て何故に古典的教養を必要とするのであるか。これに答へることが即ち教育の段階に於ける古典教育の地位を基礎づけることであり、同時にその視點から古典教育の價値を規定することとなる。

今日の教育學は教育の段階を三段に分けてゐる。第一段は基礎的陶冶又は低次の一般的陶冶である。それは未だ特定の個性乃至職業——特定の生活形式——にまで陶冶することを意圖せずして、如何なる個性にも職業にも——如何なる生活形式にも——共通に必要な基礎を養ふ意味に於て基礎的陶冶と呼ばれる。従つてそこでは低き程度に於て、一切の價値方向が追求せられ、一切の能力が修練せられるのであつて、低次の一般的陶冶とはこの謂である。普通教育は、初等たると中等たるを問はずこの段階に屬する。

第二段は職業的陶冶又は専門的陶冶である。それは専門學校及び大學各分科に於て行はれると共に、特定の職業に従事することによつて一層的確に行はれる。故に人は一旦職業に即して就學又は就職をすれば、生涯を通じて職業的陶冶を受

けるわけである。擬て職業とはこれを主觀的に——その人自身に就て——見れば特定の價值方向を中心として一切の活動を特定の形態に組織し、その生活形態を永續的に保持し、益々進めて行くことである。次に客觀的に——社會的、文化的に——見れば、職業とは社會の文化領域に於ける特定の地位役割を充たすことである。そして同時に社會から當然の報酬を受け、それによつて自己の生計を維持することである。故に職業に就くことは同時に特定の文化擔任者として特定の社會的地位を占め生計の途を得ることである。従つて職業的陶冶は人の生活を特定の價值方向に固定せしめ、人の能力を特定の形態に組織せしめる。基礎的陶冶が人間性の諸方向を平行的に助長したのに對して、職業的陶冶はそれを集中的に統合し強化し、人をして特定の生活領域に没入せしめるのである。

然しながら人は自己が没入せる特定領域の外に廣く世界と人生とのあらゆる領域に接觸せんとする要求を有する。換言すれば求心的に集中して行く反面に、遠心的に自己の人間性を擴大せんとする希望を抱いてゐる。而も斯かる要求は決して自己の職業を放棄し個性を没却する所以ではなく、却つて自己の地位職業をば廣大なる文化的社會的關聯の一關節としてよりよく理解し、自己の個性をば豊富なる世界と人生の意味内容を背景として、益々鮮明に自覺し育成して行く所以である。斯くの如く特殊の職業的領域を超えて廣く人間一般としての教養を積ましめ、囚はれたる職業人としての背後に人間としての自由なる立場を得しめんとするのが、高次の一般的陶冶であり、教育の第三の最高の段階である。

上述の如き高次の一般陶冶、人間陶冶は如何にして達せられるか。それは第一には職業陶冶の深化によつておのづから達せられるとも考へられる。職業は既述の如く特殊の中心によつて全人格を統一した生活形態であるから、そこには人間の性のすべてが多かれ少かれ包含せられてゐる。故にまたすべての方向に進めば進み得べき端緒と脈絡とが潜んでゐる。そして深く掘らんがためには同時に廣く掘らねばならぬ如く、専門化の努力は必然に多方面の陶冶を要求し、且つ可能にする。人はそれ故に自己の職業を眞に圓滿に力強く遂行して行くためには、それに關聯する各種の文化、各種の生活と必然に接觸すべく専門家としての偉大さを期することによつて、同時に人間としての偉大さに到達することが出来るであらう。

シュプランガーが「高き一般陶冶への途は、職業を通じて、たゞ職業を通じてのみ導かれる」と斷言したのはこの事態によつて裏書せられる。ケルンエンシュタイナーに於ける職業陶冶と人間陶冶との合致も亦この趣旨に外ならぬのである。

然しながら職業を通じて達せられる一般陶冶は、飽迄も特殊の中心によつて統一せられた領域であつて、それが如何に廣く如何に深くあらうとも、依然として特殊の生活領域たるを失はない。ここでは、よし世界、人生の一切が眺められようとも、それは特定の視點から眺められた世界、人生である。吾々はそれ故に、一般陶冶への第二の、而も本來の方途をば職業を離れて端的に全體的文化、全體的人生、全體的世界に向ふことに於て見出さねばならぬ。特殊から全體に擴がるのではなく、逆に全體から特殊を眺めるとき初めて人は自己を理解し、自己の職業を正しく遂行することが出来る。斯くの如く全體を端的に捉へるための一般陶冶の内容として、吾々は哲學と文藝と歴史と宗教とをその主なるものに數へる。

哲學は世界と人生とを全體として理論的體系の裡に把握せんとする努力である。世界觀の學としての形而上學や自然哲學、人生觀の學としての道德哲學や一般文化哲學は全世界を背景とする人生の全體的面目と意義とを整然たる理論として教へ、また認識論は一般に理論そのもの、可能根據や妥當性を吟味して終局の基礎づけを與へるであらう。次に文藝は個々の具體的直觀的形象を通して、世界及び人生の全體的一般的なる意味を髣髴せしめる。凡そ藝術家は理知と概念との代りに知情意の全體を、鋭き直覺と具體性の把握とに作用せしめてそこに世界を描き人生を語る。平凡なる世界の姿態と狹隘なる人生の領域とに耳目を馴らされて、日毎に魯鈍化し凡庸化せんとする吾々は、文藝との接觸によつて、世界と人生との豊かなる内容と深き意味とを與へられるのである。更に歴史は人生の過去の内容と意味とを與へて、現實のよりよき理解と未來への正しき展望とを促す。それは人生の多様の姿態を具體的に明示することによつて學ぶ者の眼界を豊富に充實せしめ、その間を貫く歴史的因果、歴史的循環を暗示することによつて、現在及び將來の自己の行動に思慮ある自由を與へる。最後に宗教は有限の現世を超えて永劫の未來に向はしめ、有限の人力の彼方に絶對の神佛を仰がしめる。人は宗教によつて一たび現世の果敢なさと人力の弱少とに謙虛なる心情を培ひ、やがては現世の裡に永遠の相を認め弱き人の心



に神佛の聲を聽いて限りなき悦びと力とに勇み立つ。この謙虚と勇敢とを兼ねたる敬虔の態度こそは、世界と人生と己れ自らとを眞に深く理解し、眞に正しく處理する者の態度である。

斯くの如く哲學と文藝と歴史と宗教とは、高次の一般的陶冶の主要内容であるが故に、人は他の如何なる職業に従事する場合にも——或はこれ等の一般的陶冶の教科の何れかを職業的に追求する者に於ても——これ等すべてを精神の不斷の糧として、自己を自由に廣大に深遠に育成しなければならぬ。専門學校や大學が職業的陶冶の外に一般的陶冶の使命を有することは言ふまでもないが、實社會に於て職業に従事しつゝある者と雖も、この種の一般的陶冶を得べき工夫を怠つてはならぬ。所謂成人教育も、眼前の功利や窮迫した時弊の對策のみを目的とせず、寧ろ高次の一般陶冶を授けることによつて、國民大衆に精神的餘裕と廣く高き見識とを與へることを意圖すべきである。

私は今や漸く古典教育の價値を斷定し得べき機會に達した。古典こそはまさに上述の一般陶冶内容を含む具體的代表的文化財である。支那に於ける經史文の古典、印度に於ける哲學宗教の古典、西洋に於ける希臘羅馬以來の各種の古典——これ等の古典は哲學と文藝と歴史と宗教との諸契機を、或は個別的に併し多くは綜合的に包含して、高き一般陶冶のため永遠の經典となつてゐる。古來の達人有識者、指導階級は何れもこれ等の古典を學ぶことによつて、人間としての豊富なる教養を獲得し、自己と人々とを高き見識に於て達觀し、その起居言動に餘裕と落付とを具へ來つたのである。古典教育が教育の最高段階に位し、指導階級の教養を保證した所以はまさにこれに外ならない。

### 三、古典の教育的價値の諸相

教育の段階に位置づけて古典教育の一般的價値を概説した私は今や更に立入つて古典教育の價値の諸相——換言すれば古典の教育的價値の諸相——を分析列舉したいと思ふ。

第一に古典は世界觀、人生觀の類型を提供する。この事はまた翻つて古典の本質を吾々に提示する。古典とは實に人が世

界、人生を思索し觀照し把握する場合の典型的方式を示すものである。例へばプラトンの『國家』篇は世界觀、認識論、國家觀、人生觀、教育觀をば理想主義的見地から整合的に把握する場合の典型を示し、ルソーの『社會契約論』は民主主義、自由主義の見地に立てる人生觀、國家觀、政治論の典型を教へる。その他東西のあらゆる古典は、人が苟も或問題を或見地に立つて考へる場合の公式的思維形態を示すものであつて、時代が移り人が變つても、同じ性質の問題を同じ見地に立つて考へる場合には、その最も代表的な考へ方がそれに該當する古典によつて與へられるのである。この意味に於て私は古典の本質をば思想の「類型」たる點に求める。それは無數の思想形態をその特徴に従つて多くの類に分ち纏めた場合に、その各類に於て特にその類の特徴を顯著に優勢に示してゐるものであつて、現代の精神科學的認識論に於ける「類型」の語によつて最も適切に呼ばるべきものである。而して類型は普遍的人間性を何等かの特徴ある組織に形成してゐるものであるから、一つの類型の示す所は人間性のすべてではなくて何等かの一面であり、従つて各種の類型が相合して初めて人間性の全貌は盡される。併しともかく或一個の古典の本質は人間の可能的思想形態の何れかの型式を特に顯著に現す點に存するが故に色彩の不明瞭なるもの、特徴の弱きものは古典の資格なく、假令集成的、折衷的なる古典でも、苟も古典であるためには、その集成の仕方、折衷の仕方が典型的でなければならぬ。翻つてまた典型的思想でありさへすれば、時代の新舊は必ずしも古典の本質に關係せず、極めて最近の或は現存中の思想家の著作にすら既に古典的資格を有するものがある。蓋しそれは前人未踏の新見地を就中代表的に示してゐるが故である。斯くして古典は絶えず創造せられ増加して行くものであるが、その本質は人間思想形態の一面的優越性に於て同類の多くの思想形態を代表する點に存する。

この一面的優越性の故に、特定の古典はその代表する特性に近き人々によつて尊重せられ、その特性に類する傾向を宿す時代に於て復興させられる。時代と人とを超えた生命を藏しながら、而も時代と人とに依存して勢力の消長を繰返す所に古典が普遍的思想形態の一面的顯現——類型——たる所以が立證せられるのである。

擬て吾々の前に横たはる雜然渾沌たる世界、人生はそれが認識に齎らされるためには、何等かの範疇によつて構成せら

れることを必要とする。この範疇的機能を果すものが類型に外ならない。而して古典は少數賢哲が多數凡人に代つてこの類型を用意して呉れたものである。故に吾々凡人は古典を學び、その思想形態に従つて世界、人生を眺めるとき、白らの凡庸の眼を以て眺めるよりも、一層正しく深く眺めることが出来る。古典の教育的價値は斯くして世界觀、人生觀の類型範疇を提供する點に存するのである。

古典を範疇として世界、人生を把握することは、同時に一種の思惟經濟にもなる。何故ならば凡人が最初から自力のみによつて不正確な淺薄な考へ方を繰返し、謂はゞ一種の試行錯誤を重ねて世界觀、人生觀を樹立して行くとすれば、その勞力は甚大に上るであらうが、先哲の典型的思惟を辿つて正しく深き世界觀、人生觀に速かに到達することは自らの精神的負擔を軽減し、思惟經濟となるからである。

右の事態は或る古典の全篇の主題や體系に關しても言はれ得るが、またその中の個々の語句や挿話に就ても認められる。例へば「臥薪嘗膽」と言ひ「會稽の雪辱」と言へば、それは單に本來の特殊の史實を指すだけでなく、何時何處に於ても復讐の忍苦や成效を一般的に指摘して、煩雜な想像や解説を割愛させる。「望蜀」とか「矛盾」とか「多岐亡羊」とかの意味する一般的事態を、若しこれ等の古典的語句を使はずして表現するとしたら、如何に煩はしいことであらう。斯くして古典は人生百般の事態の一般的意義を最も端的に明確に適切に把握し、且つ表現するための公式を提供して、吾々の精神的勞力を軽減する。この點よりすれば古典教育は子弟に過重の負擔を要求するといふ世俗的非難とは反對に、却つてそれが子弟の負擔を軽減するとも見られ得る。換言すれば、古典はその學習に多くの勞力を要するけれども、一たび學習すればそれによつて爾後の精神的負擔を著しく軽減せしめるのである。

以上の功德に關聯して古典は實に社會國家の内面的融合の媒介となる。社會の成員が同一古典の教養によつて内に同一の思想形態を啓培することは、相互の理解、交流、融合を助長する最大の條件である。國體の精華、國民精神の典型的なるものを表示する古典によつて國民が育成せられることは、そのまゝ、國民の融合であり、國家の内面的統一である。

最後に私は古典教育が學究的訓練に及ぼす効果を指摘しなければならぬ。それは古典研究が凡そ研究の態度方法に關する模範と訓練とを與へる點である。異本の校合による本文批評、同一本文に對する種々の註解——殊に相反する立場や特色ある立場に於て行はれた註解——の參酌等は、古典研究に獨自なる學的操作であるが、斯かる綿密周到なる研究に親ませることは、學徒をして自己の獨斷を抑制せしめ、先人の業績に注目せしめ、嚴正慎重なる讀解へと赴かしめるものであつて、そこに齎らされる學究的訓練の効果は蓋し測り知るべからざるものであらう。

#### 四、日本に於ける漢文古典教育の價值と方法

前節の論旨は東西の古典一般に關して述べられたのであるが、私はこゝに漢文古典の——特に日本國民教育に對する——價值に就て附説し、これに關聯して方法上の大綱を指摘したいと思ふ。

第一に支那漢文古典一般は東洋人的世界觀及び人生觀を教へ、特に東洋道德の淵源を培ふ點に於て、教育的價值を有する。支那の經史文の古典は、既述の如く高次の一般陶冶の主要内容たる哲學と文藝と歴史と宗教との各要素を渾然と融合し、而もそれ等を東洋人的特色に於て顯著に表現してゐる。加ふるに支那古典は極めて古く日本に輸入せられ、その思想内容もその記述及び讀唱の方法も日本化せられて、永く日本人の教科内容とせられて來た。故に日本に於ける支那古典は既に外國古典たるの意識を伴はぬ程に日本的教科内容となつてゐる。假令その中の若干が日本の道義觀や國體觀に背馳することがあつても、それは適切なる批評を加へつゝ、教授することによつて却て日本の國民的教養を深めることすら出来るのである。

第二に私は日本漢文古典の教育的價值を力説せねばならぬ。頼山陽の史文を想起するまでもなく、日本人の手に成れる漢文古典は、日本の道義觀念と日本的文學趣味との涵養に關して至大の陶冶力を内藏してゐるのである。

第三に日本にあつては漢文古典の教養は——支那漢文古典たると日本漢文古典たるとを問はず——國語國文の讀解の必

須條件である。極めて稀有の純粹國文を除いて、大部分の日本文献は漢字漢文の形式的修得のみならず、漢文古典の内容的素養を缺いては殆んど正確に讀解し表現することが出来ない。故に國語國文を正しく理解し正しく表現するためにも漢文古典の教育的價値は逸し難きものである。

日本に於ける漢文古典教育の價値を上述の如くに把握して來ると、私がさきに決定した古典教育の地位——教育の最高段階に於ける高次の一般陶冶の地位——は多少緩和されなければならぬ。即ち先づ國語國文の基礎としての漢文教育は基礎的陶冶たる普通教育に於て既に必要である。また日本の乃至東洋的道義觀念や文藝趣味の養成も普通教育に於て有效に行はれ得るであらう。これ等の點を考へると先づ小學校に於ては、(一)漢文古典に由來する典型的思想にして兒童の理解に適する部分を國文の形に直して國語科の教材に編入すること、(二)漢文及び漢語句の教授に際しては兒童の理解に適する程度に於てその字義語句意を本源的に解説することの二點が要望せられねばならぬ。

次に中等學校に於ては——普通教育たると専門教育たるとを問はず——(一)國語教育の中に前述の小學校への要望を一層高い程度に於て包含すること、(二)主として邦人の手に成れる漢文古典及び徳教に關係深き支那漢文古典の抜粹を漢文科として教授すること、(三)そのために漢文法の基本を特に日本文語體文法との關係に於て教授することが必要である。

最後に高等學校、専門學校、大學各分科に高次の一般陶冶の教科として支那及び日本の漢文古典を課することが希望せられる。その理由は本論文の主要論點として既に述べ盡されてゐる。但しこゝでも一般には漢文古典そのもの、専門的研究が要求せられるのではなく、高次の人間陶冶を目的とするのであるから、教材の讀解それ自身に過重の勞苦を課さぬことが必要である。そのためには獨學自習に便なることを目標として(一)本文を正しい定本にし、且つ難解の箇所には讀方や註解を添へること、所謂古註、朱註の如き漢文註釋の外に適切なる邦文註釋書を作つて參考書に提供すること(二)便利なる辭書や索引を提供すること等が工夫せらるべきであらう。そしてこゝに要求された諸點はそのまゝ、世上一般の青年及

び成人の漢文古典教育にも適用せられねばならぬ。寧ろその方が高次の一般陶冶の本來の趣旨である。

最後に大學及び専門學校に於ける専門的漢文古典研究は、本文批評や註解に關する文献學的操作に就ても、思想内容の検討に就ても、最高の標準に立つて、その蘊奥を究めねばならぬ。そして就中學生をして既述の如き學究的修練を積ましめることが必要である。それと共に最高研究の業績を根底として前述の高次の一般陶冶の目的に有效なる本文定本、註釋、辭書、索引等の編著をも擔任すべきである。

### 結 語

漢文古典教育が上述の如く日本の國民教育の全體系を通じて、上中下各々その特色を發揮しつゝ、實施せらるべき事態に到達したのは、それが長き傳統を経て完全に日本化せられたからである。この事態は翻つて日本國民が外來文化に對して取るべき態度の典例を示すことにもなる。西洋の古典もまたその價值を正しく理解し、就中日本文化に寄與すべき契機を批判的に攝取し、その教育方法を日本教育制度の中に合理的に定位せしめるならば、そこに形成せらるべき日本文化は驚嘆すべき豊かさや高さをも具へ得るであらう。要するに古典教育を時代錯誤的なる遺物と見る代りに、その永遠的價值を認識し、外來古典を偏狹なる國粹思想によつて排撃する代りに、祖國文化への必須の契機として綜合すること——而して斯かる價值を有する古典教育が一見國民に過重の勞力を課するが如くに見えても、その實は國民の精神的負擔を軽減する方面のあることを確認すること——更にこの價值と負擔軽減とをよりの確に實現するためには古典教育の方法を全教育體系の中に於て合理的に考慮すること——これ等の諸點をこの小篇によつて論結し得るとするならば、私の意圖は果されたわけである。